



日本キリスト教団
三軒茶屋教会
<http://sanchurch.jp/>

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
 第58号 2018年12月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
 TEL/FAX: 03-3418-4933
 発行: 三軒茶屋教会 広報部

「教会での奉仕や集会になかなか加われなくて」「そろそろ若い世代に譲りたい。」どの教会においても、同じような声が語られているのではないか。

礼拝当番、会堂清掃、週報発送、部会や委員会活動、支区や教区での奉仕、関わりのある外部団体関連での奉仕。祈祷会などの集会。今やその多くに関わるのは簡単ではない。そうした背景にある事情は多岐にわたる。高齢化、家庭の事情、価値観の変化、多様化する生活スタイルなど、より多くの時

間を教会の活動に振り向けられる生活環境にある人は、そう多くはいない。では、そのような現実には、キリスト者はどう向き合おうとするのか。

教会が直面している現実を踏まえて、日本基督教団では次の伝道推進基本方針を定めている。「祈祷運動―共に祈ろう」「信徒運動―共に伝えよう」「献金運動―共に献げよう」この三点を掲げて、各個教会に呼び掛けている。

「共に祈ろう」とは、毎月第三主日を「日本伝道の推進を祈る」として各教会にて祈りを合わせる。

「共に伝えよう」とは、主日礼拝において聖霊の力を受け、聖書を読

祈り、伝え、献げる

―キリスト者の務め―

牧師 伊藤英志

み、主の恵みを喜んで証しし、キリストの十字架による罪のゆるしの福音を宣べ伝える信徒として共に成長することを目指す。

「共に献げよう」とは、各地で日夜伝道のために苦闘している教会・伝道所を覚えて、その働きを支えるために共に献げる。これによって、信徒と教師における献身の志が高められ、献身者を生み出す教会となるように献金運動を展開する。

こうした教会運動に、目新しいものはない。むしろ、本来ならどの教

会にも現れているはずのキリスト者たちが織り成す営みである。

しかしながら、このような運動を敢えて掲げなければならぬ。いさまた、今日の諸教会が置かれた現実が見えてくる。

共に祈らず、共に伝えず、共に献げない。もし諸教会がそうなら、いかならば、何が起るだろうか。信仰は、個人的な趣味の事柄になる。信仰による交わりは旧知の親しい人間関係を温存させるためのもの

となる。世代間に生き生きとした信仰の共有が実らず、元気がない教会となってしまう。

祈り、伝え、献げるとは、信徒や教師の区別なく、どの時代のキリスト者にとっても本来の務めである。この本務がおろそかであれば、その教会に未来はない。

朝の祈り、夕べの祈りを欠かさないだけで、誰かの大きな支えとなり、自分自身の憩いの時ともできる。

伝えるとは、理論や正解を語るに限らず、毎週の主日礼拝への出席を



重んじるだけでも、何かが誰かに伝わっていく。献げるとは、財や奉仕活動にとどまらず、祈りの時間、気遣いや配慮

を献げることもできる。神の御業は、キリスト者が祈ろうとし、伝えようとし、献げようとする、この務めによって今現に地上にある現実を乗り越えて、目に見える業となって現れ出る。

キリスト者どうしが担い合うこの本来の務めによって、救いの御業は地上の誰かに確かに現れる。

キリスト者たちは、神の御業の現れに喜び合っている群れとなつて、教会と結び合わされているのだ。